

## 共に生きる未来をめざして

奈良学園登美ヶ丘中学校 1年 坪内 綾音

「お母さん、ここはどこ？」

「山里の村だよ。この柿の実おいしいよ！食べてごらん。」

「本当だね。お母さんありがとう。」

もし、自分が人間ではなく、深い山の中に生きる1頭のクマだったら。最近よくニュースで見かける「クマの出没」の映像をきっかけに思いをめぐらせてみた。人間の私は、環境省の出没情報数や人身被害数、捕獲数のデータでの数字やテレビに映るクマを見て「街に下りてきたら危ないな」「どうしてクマが人の前に出てくるのかな」としか思わなかった。しかし、もし逆の立場だったら、もし自分がクマであつたとしたら、全く違う景色が見えてくるのだろうか。

クマの「私」は1年の大半を山の豊かな自然の中で過ごしているだろう。春には冬眠から目覚め、芽吹いたばかりの木々の新芽を食べる。夏には冷たい川に入って魚を捕まえたり、森をさまよって大好きな昆虫を探したりする。秋になれば、厳しい冬を乗り越えるために、ドングリなどの木の実を夢中で食べる。木々の中に住み、一生懸命に生きる。それが、クマである「私」の、当たり前の日常である。山はクマにとって、誰にも邪魔されたくはない大切な棲み家なのだ。

しかし、「私」たち親子は、今村里にいる。森にエサがなくなってしまったのだ。人間が開発で山を切りくずしてしまったと「母」は言った。「私」は食べ物を探し求めて、生まれて初めて森の奥から一歩外へふみ出す。山を下りていくと、見たこともない奇妙な世界が広がっている。緑の木々は消え、灰色で固い地面がどこまでも続いている。そこには、キラキラと光る果実を実らせた木や、おいしそうな匂いをただよわせる大きく四角い箱が置かれている。お腹を空かせた「私」は、生きるためにその食べ物に引き寄せられていく。人間が言う「畑」や「ごみ箱」が「私」にとっては命をつなぐための最後のとりでなのだ。

山里に出た「私」に、人間たちが大声を張り上げ、そして「私」に向かって何かを投げつけてくる。「私」はただお腹が空いて、食べるものを探しているだけなのに……。なぜこんなにも恐れられ、追い回されなければならないのだろうか。人間たちの目には、怒りと恐怖が浮かんている。それを見て、クマである「私」もまた、怖くてたまらなくなる。お互いの言葉が通じないからこそ、恐怖が恐怖を生み、パニックになってしまう。

ニュースで見る「クマが人間を襲った」という出来事も、もしかしたらクマ側は「恐怖のあまり自分を守ろうとした」という結果なのかもしれないと、クマになった「私」は気づいた。

こうしてクマの気持ちを想像してみると、1つの疑問が湧いてくる。そもそも、なぜ山に食べ物がなくなってしまったのだろうか。

それは、地球の気候が変わってしまったことが原因かもしれない。だとすれば、クマを街へ追い出したきっかけを作ったのは、実は人間自身ではないのだろうか。それなのに、境界線を越えてきたクマだけを「悪者」扱いとして駆除してしまうのは、どこか理不尽な気がしてならない。クマは生きるために必死に行動しているだけで、何も悪くない。それなのに、人間の都合で危険だ、物騒だと判断され、銃で撃たれ駆除されてしまうのは、クマにとってやり切れないだろう。「私たちはあなたたちを困らせたいわけではない。ただ、自分の棲み家である森で静かに暮らしたいだけだ。」とクマの「私」は人間たちに訴えたい。

人間としての私は、この問題に対して何かできるかを考えなければならない。人間とクマが完全に分かり合うことは難しい。だからこそ、大切なのは「お互いの領域を守ること」が必要だ。人間は、山を荒さず、自然を豊かに保つ方策を考える。同時に街にゴミを放置しないなど、クマを人里に引き寄せない工夫をする。そうやって、見えない境界線をしっかり引くことが、お互いを守る優しさになるはずではないか。

「お母さん、これからは森の中でドングリを食べて、静かに過ごしていきたいね。」

「そうだと。街は私たちの棲み家なんかじゃないのよ。」

環境を整え、人間と野生動物がそれぞれの場所でおびやかされることなく共に生きていける未来について、これからも考えていきたい。